SUWA.R.C WEEKLY

＜週報№2,876＞　2,987 回例会

２０１９年４月５日（金）

■会長／古屋　了　■幹事／加藤　明博

◆司会＝川村総一郎　副ＳＡＡ

◆ゲストビジター＝本日はいらっしゃいません

◆出席報告

本　　日	６９．０５％	１７名欠席
前 回 訂 正	８４．４４％	８名欠席

◆ラッキーナンバー＝№28　森 幸俊君

◆ニコニコボックス＝●古屋 了君、加藤明博君＝本日から正会員となる合田さんが例会に出席します。皆さん宜しくお願いします。●小針哲郎君＝昨日息子が城南小学校に入学しました。●森 幸俊君＝ラッキーナンバーに当って。

◆会長告知・古屋 了会長＝「万代に年は来経とも梅の花絶ゆることなく咲きわたるべし」。これは、万葉集の巻第五にある梅花の歌三十二首の一つ。「どんな時代であれ年は来て過ぎて行くけれど、梅の花は絶えることなく咲き続けるだろう」との意味です。新元号「令和」は、この梅花の歌三十二首の序文が拠り所とのことです。

諏訪の梅も見ごろを迎えました。新年度、人不足の中、希望に燃える新入社員を迎えられた会員企業もおありかと思います。本日、諏訪クラブにも女性が新入会されます。おめでとうございます。

「令和」の考案者と目されるのは、国文学者の中西進氏（89）で、万葉集を中心に日中の比較文学の研究をしてきた第一人者だそうです。「潮」という月刊誌では、数年来この中西氏の随筆が巻頭を飾っています。中国の古典や古事記、日本書紀といった角度から、時事問題の本質をとらえようとしているのが面白くて、無学ながらも興味深く読んでまいりました。ただ、この３月・４月号では、一昨年取り上げたはずの聖徳太子の「17 条憲法」の第一条「和を以て貴しと為す」について再び深掘りしていて「妙だな」と思っていましたが、なるほど考案者だったのかと納得でした。

中西氏は令和の「和」についてこう語ります。天皇陛下は昨年末、戦争のなかった平成の世を振り返られ、現平和憲法を持続し、絶え間のない平和祈願をすることが象徴としての在り方だというお考えを示しました。この「非戦憲法」を理想論に終わらせない政治的実践の前例が日本にはある。それが「和を以て貴しと為す」を第一条とする聖徳太子の「十七条憲法」だというのです。制定された 604 年という年は、新羅との泥沼化した戦争から手を引いた翌年で、太平洋戦争終戦後の新憲法制定とも状況が重なります。

では、果たして軍備なくして国は守れるのでしょうか。聖徳太子はその具体案として第二条で「篤く三宝を敬え」と示しました。三宝とは仏・法・僧です。仏教をもって国際紛争を抑止せよというのです。インドのアショーカ王が軍事による統治を悔い改め、仏教による一大平和国家を建設した故事に倣ったものです。太子の精神は、古事記では倭建命の逸話、国分寺を建立した聖武天皇、藤原道長、源実朝、徳川家康へと継承され、今上天皇の平和への祈りにつながる日本独自の精神の系譜にほかはないと断言しています。藤原正男さんだったらどう評価されるでしょう？藤原さんの最終回はいずれとして次週は「令」の背景を推察します。

◆幹事報告・加藤明博幹事＝①本日のクラブフォーラムは新入会員の卓話です。宮坂会員宜しくお願いします。②平林会員の御母堂様が 3 月 25 日に亡くなりました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。③本日より新入会員の方が例会に出席しております。合田敦子さんです。後ほどご紹介させていただきます。④18 日に布半で行う諏訪湖ロータリークラブとの合同例会ですが、まだお返事を頂いていない方が数名おられます。一人でも多くの方の参加をお願いします。⑤本日の例会後に月初の理事会を行いますので、理事の方はお集まりください。

◆新入会員セレモニー・合田敦子会員＝

(有)エージーの合田敦子と申します。以前、布半さんに職員として在籍していたこともあり、諏訪 RC については昔から存じておりました。この度、お仲間に入れていただいたことに感謝いたします。奇しくも本日 4 月 5 日は私の誕生日です。このような素晴らしい誕生日は、一生忘れることが無いと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

◆新入会員卓話・宮坂康博会員＝本日は、「長野日報創刊 118 年の歴史と今後 ～ネット時代との共存を目指す～」という内容でお話をさせていただきます。現在、新聞業界は大変厳しい状況にあります。新聞発行部数は、2008 年に全国で 5149 万部あったものが、右肩下がりで 2018 年には 3990 万部に落ち込んでおり、新聞離れが顕著になっております。先日の TV で「平成時代にやめたものはなんでしょうか」という番組をやっており、一番は「タバコ」でしたが、残念ながら二番は「新聞」でした。続いて、新聞販売所の従業員の推移です。これも、2008 年には全国で 41 万 7 千人おりましたが、2018 年には 28 万 6 千人まで減少しております。従業員の内訳ですが、副業の女性が多く約 40%を占めております。昔は新聞少年が配達しているイメージがあったかと思いますが、近年は部活や塾などで忙しく、副業の女性に頑張っていただいているというところが現実です。媒体別広告費の構成比は、2008 年には新聞広告が全体の 12.4%を占めていましたが、2017 年には 8.1%になってしまいました。それに対し、インターネット広告は、2008 年に 10.4%だったものが、2017 年には 23.6%と大幅増となっています。一方で、新聞についての評価ですが「情報源として欠かせない」、「地域に密着している」、「情報が整理されている」、「読んだことが記憶に残る」などの項目は、他のメディアに比べて高い評価を受けており、まだまだ、新聞の重要性も感じていただいているようです。

次に、新聞の機能と役割についてお話します。①一覧性 好きな場所で都合のいい時間に、ニュースを見比べながら、読みたい記事を読む。飛ばし読みや拾い読みもしやすい。②多い情報量 新書一冊分と言われる情報量。内容を詳しく伝えられる。スポーツの記事やスコア、競技の入賞者名は新聞ならではの詳細な情報。③保存性 印刷された新聞は繰り返し読むことが可能。保管も比較的簡単。保存された新聞は歴史の記録として、重要な資料。こういったところが新聞の特長です。

ここで、長野日報ついて少しお話をさせていただきます。明治 31 年に下諏訪町で「諏訪新報」として創刊。昭和 17 年に戦争の関係もあり、政府の方針により信濃毎日新聞に統合。昭和 20 年に週刊「南信」として復刊。昭和 24 年に「諏訪日日新聞」諏訪市版を発刊。昭和 62 年に夕刊から朝刊に変更。平成 4 年に題字を統合し「南信日日新聞」から「長野日報」へ。平成 18 年に記事の署名化がスタート。平成 20 年には、1 ページ 15 段制から、12 段制に切り替え。平成 24 年から題字を季節ごと 4 色に分けて発行。平成 29 年には「シニア日報」を発刊。といった変遷を辿ってきております。長野日報ならではの工夫としては、①四季折々の題字　原田泰治先生デザインで、春は若草色、夏は青色、秋は橙色、冬は紫色にして題字で季節を先取り。②各面に空白の行が無いように文書を構成。③写真に写っている人の顔が、新聞の折り目部分に重ならないレイアウト。などがあります。

新聞製作の流れは次のようになります。記者は取材後にパソコンで記事を作成し、写真と共にサーバーに送ります。デスクはサーバーから記事と写真を取り出し、内容をチェックし、編集会議で決めた紙面計画に沿って各面に送ります。編集局整理部では、ニュースの格付けを行い、見出し付け・レイアウト・校正をして、製作局へデータ出力します。整理部から出力した紙面データはアルミ製刷版に直接プリントされて出てくるので、そのまま高速輪転機にセットして印刷を行います。刷り上がった新聞は販売店ごとに束ねられ、各販売店に送られます。ちなみに、先日の新元号「令和」決定時は、午前 11 時 41 分の発表の約 1 時間後、午後 0 時 35 分には上諏訪駅前で号外の配布を開始しました。

最後に、これからの長野日報についてですが、①地域に密着した記事を掲載し続ける。地域住民になくてはならない情報を提供する。②紙を大切にしつつインターネットとの共存を模索する。③長い伝統を大切にし、諏訪圏域の発展に寄与していく。これらのことが今後の進むべき道ではないかと考えております。今後も多くの方々に、「諏訪のことがわかる長野日報」をご購読いただければ幸いです。御清聴ありがとうございました。

◆今後の例会日程

4 月 12 日	金	クラブフォーラム（会員増強特別委員会）
4 月 18 日	木	諏訪湖ＲＣ合同花見例会，ガバナー補佐訪問
4 月 19 日	金	休日
4 月 26 日	金	クラブフォーラム（ロータリー情報）

執筆担当　五味武嗣